

陶遊

2003年7月19日発行第441号増刊
昭和45年7月26日第3種郵便物認可
盆栽世界7月号増刊

43 2003
July

あなたもできる陶芸誌

特集Ⅰ

楽焼のすすめ

土の生命いのちを導き出す

土と火の宴、楽茶碗をつくる

コークス窯で焼く楽焼

こだわりの味わい

特集Ⅱ

コーヒーカップ

プロが教える 軽くて持ちやすい珈琲碗づくり
世界の「コーヒーカップ」コレクション

陶芸教室の仲間で造った

虚空窯 (穴窯) 焼成

指導 白次丈治郎 (虚空窯陶芸教室主宰)
レポート 菅原 誠 (虚空窯陶芸教室)



「窯は生き物」を実感

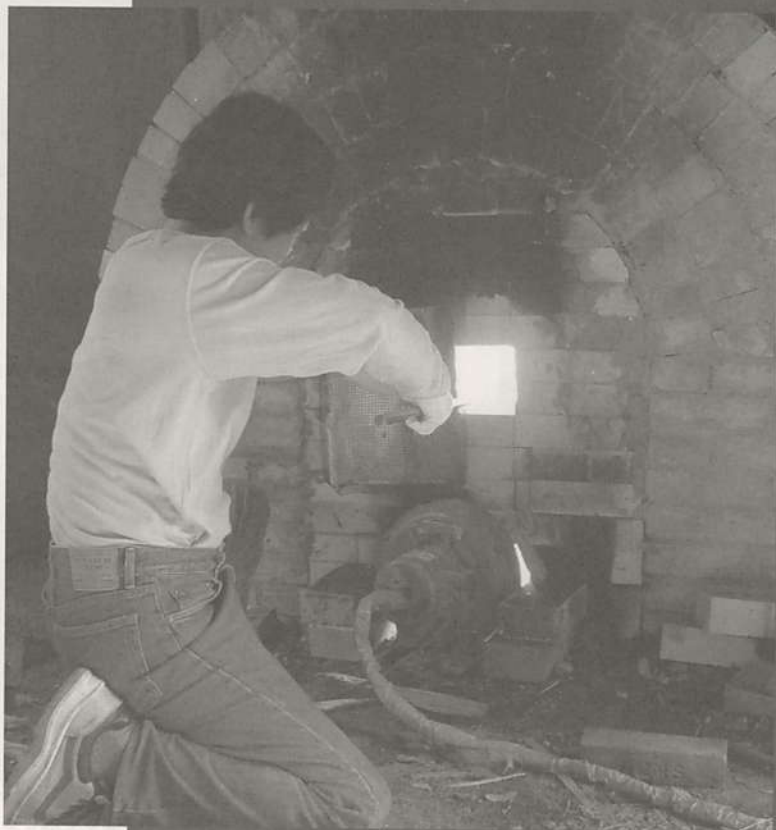
本誌37号で、窯焚き燃料にPE Tフィルムを試験的に使用した薪窯焼成と、その焼成作品を紹介した「虚空窯」。

「虚空窯」は、陶芸家・白次丈治郎氏が指導する虚空窯陶芸教室の生徒有志によって、手造りされた薪窯である。したがって、その焼成に際しても、教室の生徒が当番制で当たる。なかにはすでに悠々自適の方もおられるが、家庭の主婦や現役サラリーマンも多く、数日にわたる薪窯焼成には、休日

を有効に利用できる時期が選ばれる。今回も4月末から5月上旬のゴールデンウィークが窯焚きとなった。

焼成作品の窯出しは、自然冷却を終えた5月11日であった。午前9時には、期待に胸を膨らませた仲間たちが集まった。早朝から、朝取りした旬のタケノコを、にわか仕立ての穴堀かまどで大きな鍋に湯が沸かされ、窯出し前の腹こしらえが始まっていた。

窯の焚き口が開けられると、集まった仲間全員で中を覗き込む。



徹夜で窯焚きする白次丈治郎氏

ライトで照らし出された窯の中には、松灰がかかって光沢を放つ作品群が浮き出されていた。まだ数十度はあり、余熱と輻射熱がこもる窯の中に最初に入ったのは白次氏であった。

外には、窯詰め配置にそって作品が並べられる大きな青いシートが敷かれる。最初に窯から出されてきたのは、焚き口近くにあつて、黒ずんだ灰をたつぷりと被った壺類であった。しかし、残念なことに、窯詰めの際に作品が近づきすぎていたためか、灰釉で作品同士が癒着した状態で現れてきたのである。しかも、焚き口近くで、松材投入の際に薪が当たったためか、一部に穴が空いたり破損していた。

次々と作品が取り出されてくる。自分の作品が現れるたびに、歓声が上がると、過去の窯焚きは三回目とあつて、過去二回の成果から期待は大きかった。しかしその慣れが災いしたためか、火前側の作品は思ったほどの焼き色にはなっていないのである。その理由は、4月28日に最高温度に達した時点で、薪が足りなくなつたことであつたのではないかと。もう少し薪を加えて、煉らしの間を引くことができたなら、という色に上がっていたはずだ。

うという。反省点であると同時に、窯焚きの難しさ、窯焚きは一回一回が勝負だということとをそれぞれが実感する窯出しだったのである。

ここでは、焼成グラフも含めた4日間にわたる窯焚き記録とその模様を、参加者の記録から紹介していただき、あわせて今回の焼成作品を紹介しよう。(編集部)

虚ろ窯での焼成

レポート／菅原 誠

前回の工業用PETフィルムの廃棄物を利用した焼成では、臭気もなく薪と同じように陶器を焼き上げられることがわかりました。しかし、薪用の窯の構造からくる問題点―フィルムがすぐに熱分解してガスを発生するため多量の煤が発生―があり、少量のフィルムをしょつちゅう供給しなければならぬ状態でした。

陶芸の話から外れますが、廃棄物の問題は大きな社会問題です。日本PETフィルム工業会の技術委員に、この虚ろ窯でのPETフィルム焼成の話をし、「陶遊」の今年の1月号を見せたところ、各技術委員から「なかなかすばらしい実績だ」「経済産業省に新しい事例報告ができる」と賞賛の言葉をいただきました。この技術委員会の方々は、プラスチックに造詣

が深い日本の一流企業の技術者であり、プラスチックを効率よくリサイクルすることや、毒性なく焼却させることの重要性を深く認識している方々です。プラスチックは我々の生活向上において役に立っていますが、その廃棄問題を避けて通ることはできません。したがってリサイクルは極めて重要な問題です。

しかし技術者の目からすれば、このリサイクルについては、余計に石油を消費しなければならぬといった不合理的な事や、再生品の安全性の保証をどうするかといった問題があります。また燃焼についてはほとんどのプラスチックを問題なく燃焼できる炉と、生ごみを燃やしてもダイオキシンが発生する炉が区別されることなく議論されたり、プラスチックだけが問題となつたりして疑問は多いのが実情です。さらにリサイクル問題は、単に技術的な問題だけでなく政治的問題がからんで一筋縄ではいかない状況です。したがって廃棄物のいろいろな用途を検討しておくことが必要です。前回のPETフィルムによる穴窯焼成はこの廃棄物問題に対するささやかな試みでした。

閑話休題

今回はPETフィルムは用い



織の掻き出しも欠かせない

今年のゴールデンウィークは飛び石連休のため、サラリーマン主体の陶芸教室では毎日窯の番をすることができないという問題がありました。そこで、はじめは灯油バーナーで暖めて、それから松を入れる計画をたて、初日と二日目は徹夜することなく過ごせる予定でした。

さて、灯油バーナーですが、火をつけようとしたところ火がつきません。さんざん悪戦苦闘して、結局分かったことは、手元にあったのはバーナーではなく、灯油を霧状に供給する装置だったということでした。そのため火種が必要です。ということは、やはり誰かが付きっ切りで薪をくべて火種を保持し、そこに灯油を吹きかけるようにすることが求められます。「さあどうするか」ということになりませんが、この程度のことでは驚いては、穴窯焼成はできせん。初日の夜は大きな木や薪を入れてとりあえず少し温度を上げるだけにして、2日目の夜は白次先生と奥さんが徹夜することになりました。実は白次先生と奥さんは熟年ながら新婚ほやほやのカップル。日曜日に予定の入っていた私は、土曜日の夜中に少し手伝おうとしました。ところが妻から「先生は奥さんといっしょなんで

しよう。邪魔しちやだめよ」といわれて躊躇しました。しかし「どうせ私は無粋ですよ」と言い捨てて夜中の1時過ぎまで窯番をしました。実は奥さんは昼間に陶芸教室で生徒さんの面倒をみていて、徹夜は大変であることが分かっていたので。はい、決して新婚さんの邪魔をする気ではありませんでした。

話は元にもどって窯の話の続きです。灯油の注入は温度を上げる事に対しては効果的でした。ただし音がうるさくて閉口しました。だいたい夜の窯番というのは空気が流れる低い静かなゴーツという音、薪がパチパチとはぜる音以外は静かな雰囲気なのですが、今回はプロアの音があまにもうるさく、話をしていても聞き取りにくい状況でした。

窯の焼成には我々素人が知らないいろいろなテクニクがあるの本に書いてあります。例えば、薪については、松食い虫に食われた松はだめだとか、樹齢は70年〜150年の物が良いとか、伐採は8月〜2月の間で行うべきとか、乾燥はできれば1年以上、好ましくは2年とか、等々。実際、ゴルフ場の松は購入した松とは違いました。火力があまり強くないのです。書物に書いてある問題のある松だ



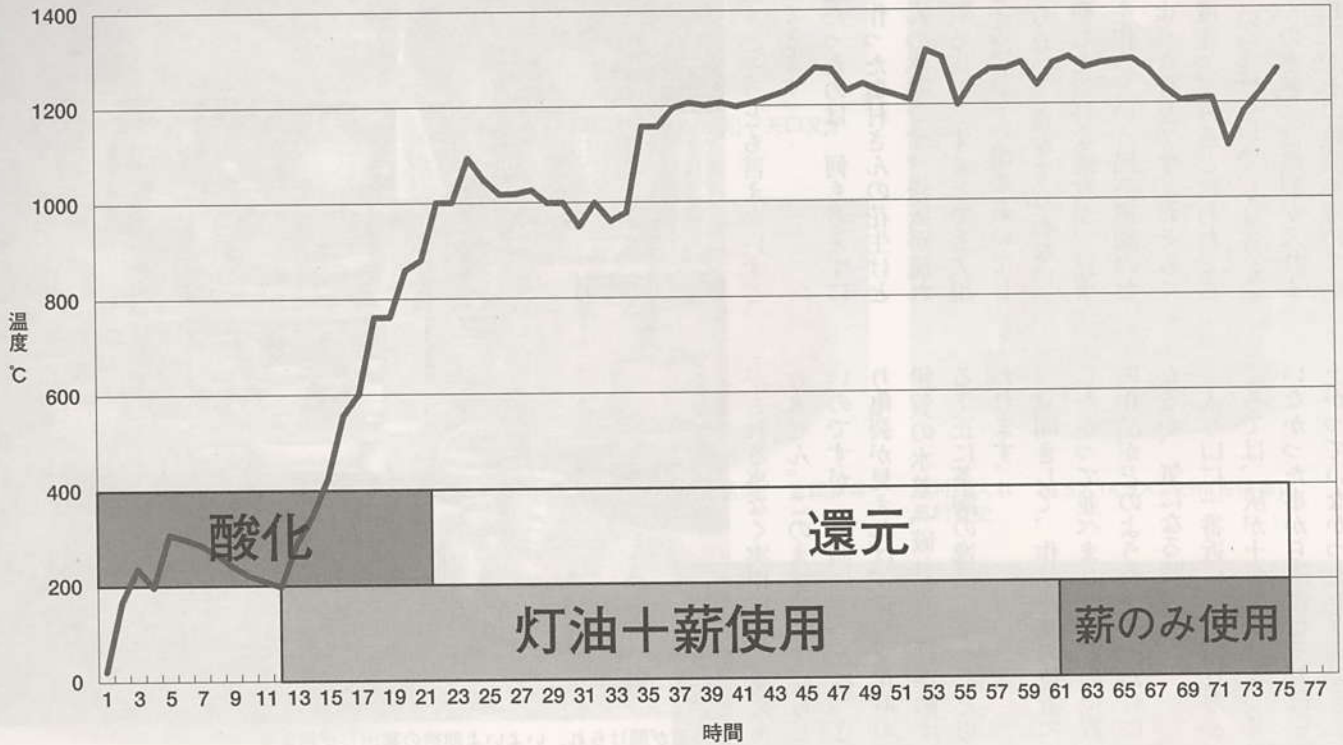
焚き口前にテントを張り、焼成データをつけながら寝ずの窯焚きが続く

ったのかもしれない。切り倒した後、放置されていたので松ヤニが流出したのかもしれない。

しかし我々は、そんなことは気にせずにとりあえず温度を上げることに集中しました。文明の利器は使うべきと考え、灯油プロアはずっと使用しました。人手が足りないこともあり、作品の置いてある場所をしっかりと頭に入れていない人も同じように薪をくべて燻を掻き出したわけで、作品こそ掻き出しはしなかったものの作品の下に置いた煉瓦を掻き出してしまふという事態になり、後でこの煉瓦の上に作品を置いていた人は泣

いていました。

さて火入れをして3日目の日曜日の夜は「酒と陶芸を愛する会」の会長を初め、酒と陶芸について一言二言ある連中が集まって、旨い酒を片手に陶芸談義をしながら窯番を勤めました。野々村仁清や板谷波山に感動する一方で焼締の素材は何にも代えがたいとか、陶芸はどうあるべきかを、柳宗悦や浜田庄司とまではいかなくても、延々と半分は酔いながら議論し続けたのでした。男は年をとってもどこか青年の思いを持っているわけで、このような談義は楽しいものです。男性は4人もいたの



ですが、一人は薪割り、二人は横と正面からの薪くべ、一人は記録と写真撮影で、これに討議の時間と酒を飲む時間を入れると楽しくて忙しい夜でした。温度の記録を見ますと、ところどころ温度が50°C以上下がっています。このときは酒を片手に陶芸論議がなされていたことが分かります。

陶芸談義に熱が入りすぎたためではないと思いますが、灯油のプロアモーターが焼けてしまいました。こうなるともう松の薪しかありません。温度を維持するためにせつせと薪をくべ続けました。その結果、薪が思ったよりもはるかに早くなくなっていました。

4日目の夜はやる気十分の女性2人も窯番をする予定でしたが、もう薪がありません。しかたがないので窯に蓋をして最後は打ち上げの飲み会になってしまいました。ゴールデンウィークの後半は、陶芸教室の多くの人が家族サービスマや個人の作業に追われました。そこで待望の窯開きは5月11日になりました。

待望の窯開き

この白次陶芸教室の良いところは枠がないことです。今回の焼成作品については、テーマを持って臨んだ人や、直感で作った人、どこかの作家の真似をした人や、ま

るで何にも考えずにただ作った人などがいました。人によっては構想だけで時間を費やし、ついに作品はできなかつた人もいます。どんな人に対しても先生はけつして否定的な発言をされません。実は完全にあきらめてしまつておられるのかもしれないが……。

松本幸四郎さんの抹茶茶碗のテーマは「山と溪谷」。小林幸子さんのテーマは「二億ためる貯金箱」それ以外にも「女と愛」(よほど過去に辛い失恋をしたのでしょうか)や「地球と宇宙」などなど。

元ソニーミュージック関連会社の社長をしていた小野泰一さんはあくまでも直感にこだわって作り上げました。音楽界で培った直感で作った作品はプロイロ的に言えば深層心理が表れて独特なエロチイズムを表現(人によってはグロテスクだという人もいますが)していました。

また同じく直感で作った建築会社の山田均さんの作品はがっちりとしたシンプルな構成で、いつも安全第一を考えているプロの感性が現れていました。

いかにも信楽や伊賀風の作品は、しろうとであっても、どうかしろうとだからこそ出る素材さがにじみ出ています。悪く言えば稚拙といえなくもありませんが、



窯の蓋が開けられ、いよいよ期待の窯出しが始まる

火を通すとそうとも言えない小ささが出てきます。

秀逸だったのは、何も考えずに無心で作った奥村さんの花生けと岩田さんの水差です。松灰が流れて、凍れる炎のしずくとでも表現すべきすばらしい出来あいでした。飾らない、奇をてらわれない、機能に徹した素朴な感覚が、見事な作品を作るといふ民芸運動のお手本のような作品です。おそらくもう一度作ってみると言われても難しいのではないのでしょうか。岩田さんの水差には亀裂が入りました。松灰がその亀裂を埋めて水

がもれる事なく実用に差し支えありません。このままでもすばらしいのですが、外側にもつとはっきり亀裂が見えれば、重要文化財の伊賀の水差「破れ袋」に匹敵する？正に茶陶の逸品になったと思われれます。

窯開きして、作品を窯の位置にしたがって並べました。どの位置の作品がどのような焼き上がりになるか、気になる時です。

入り口に一番近い灰かぶりのところでは、灰が十分に溶けきっていないかった事から温度はそれほど上がっていないと推定できま

す。これは前回もそうでした。少し改良する必要があります。

少し中に入った灰かぶりのところは見事な出来具合となっていました。今回、薪が足りなくなりました。今回、薪が十分に熱量がいきわたったと考えてよいと思います。

灰かぶりの後ろは通常、きれいに焼き上がるのですが、今回はあまり発色していません。温度が少し足らなかつたのか、還元が弱かつたと思われる。本来なら十分に温度が上がるはずが、灯油の噴霧で炎の流れがこの部分を通り越してしまつて温度計の部分のみを熱したか、プロアの影響で酸化が強かつたのではないかと推定します。反対に煙道近くの陶器は緋色が出ていますが艶がありません。

これは還元炎に包まれていたのですが温度が足りなかつたと思われれます。今回の薪による焼成と前回のPETフィルムによる焼成を比較すると焼き上がりは前回のほうが良いといえます。

前回の焼成時間は約66時間で、今回は当初の予定より早くなつたとはいえ74時間焼成しています。さらに1200℃より高い時間を比較すると今回は約20時間に対して今回は約40時間となつていま

す。1300℃以上は前回5時間にも満たないのに、今回は10時間以上です。

それにもかかわらず、今回の発色が弱くて、温度も足りないのは以下の理由です。

①温度計のある窯の登頂部分は、たしかに温度は高かつた。

②しかしこの登頂の温度は灯油プロアからの炎の流れが直接当たつたためで、作品が詰まっている窯の下部はむしろ温度は前回より低かつた。

③そのため火に近い一部を除いて松灰は充分に溶けなかつた。

④さらに今回はフィルムを用いて強還元を行う事ができた。今回は還元度合いが少なかつた。

今回の焼成は本当ならもう一晩から一日程度焼くつもりでした。そこまで焼ければ全体の温度も上がり、中央部分ももう少し良い色となつたと思えます。いずれにせよプロアの使用は初期だけにすべきでした。

全体をゆつくりと暖め、なるだけ均一な状態にもつていくことの重要性を認識させられた今回の穴窯焼成でした。ご自身の作品について、生徒さんの何人かは感想をよせて下さいました。みなさんの穴窯に寄せる思いが伝わってきました。



片口 20×20×10cm(古信楽) 片野美絵子



片口 24.5×24.5×10cm(古信楽) 矢口文子



耳付花入れ 14.5×14.5×21cm(古信楽)
奥村貴史



中深皿 25×25×10cm(ブレンド)
梶山富士子



小皿 9×9×4cm(古信楽) 吉崎幸孝



深鉢 20×20×13cm(ブレンド) 木村まゆみ



水指 16×16×16.5cm(古信楽) 岩田和子



茶香炉 38×38×16.5cm・13×13×3cm(古信楽) 寺西敬子



長皿 45×45×21cm(2枚)(古信楽) 中島玲子



中皿 23×23×6cm・21×21×6cm(古信楽) 高橋みどり
想像とは違う感じの色の仕上がりでしたが、自然の色がとてもいい感じで気に入りました。



木の葉皿(2枚) 22×22×2.5cm(信楽) 島根すみ子



茶碗(2碗) 12×12×8.5cm(古信楽) 金田康子



茶碗 10×10×6.5cm(2点)(古信楽) 松本幸四郎
テーマ「山と溪谷」



徳利 6.5×6.5×10cm・6×6×11.5cm(古信楽) 長堀良男
轆轤挽きの時、縮めて伸ばすことが難しく感じられたし、できなかった。焼き上がりはもう少し赤みがほしかった。



深鉢 26×26×9cm(ブレンド) 寺島京子
思っていた以上に出来上がりました。お花を生けるのが楽しみです。



耳付花入れ他 11×11×20.5cm・9×9×7.5cm・8×8×16cm(古信楽)
大山和美